



社員・家族とともに

日本ユニシスグループにとって、社員やその家族はお客さまと同様に大切なステークホルダーです。社員が安心して働き、日々、自らを高めていけるように、さまざまな活動に取り組んでいます。

社員と人事担当役員との座談会

習得した知識や技術を“お客さまの価値向上”につなげていくためには何が必要なのか——技術力向上を目的とした各種制度を利用している6名の社員たちに語り合ってもらいました。



座談会参加者

(留)=留学制度、(テ)=テクニカル・シンポジウム、(技)=技報優秀論文

- 01 高木 歩 日本ユニシス 人事担当常務執行役員
- 02 加藤 公一 (留)日本ユニシス 先端技術部
- 03 星野 力 (留)日本ユニシス 人材育成部
- 04 米田 健治 (テ)ユニアデックス OSS推進部
- 05 萩谷 有紀 (テ)日本ユニシス 3D-VEセンター
- 06 道坂 史明 (テ)日本ユニシス エネルギー第一統括プロジェクト
- 07 高橋 秀樹 (技)ユニアデックス OSS推進部

日常を客観的に見つめなおすことで、見えてきたこと——

高木 みなさんは、それぞれ技術力向上のための機会や制度を利用されたわけですが、それらの経験を通じてどういった“気づき”がありましたか。

米田 テクニカル・シンポジウムに参加するにあたって、これまで自分の中で曖昧にしてきたことや、仲間内では暗黙の了解となっていることなどを第三者に説明する必要がありました。自分の研究を客観的に見つめなおせたことが、技術力の向上につながったと思います。

道坂 私は過去3年ほど従事してきた大規模プロジェクトの

データベースの運用保守について論文を書いたのですが、米田さんと同じく、あわただしい開発業務の最中にはできなかった全体像を見つめなおすという作業を通して、良かった点、悪かった点、次回への改善点などを認識できたことや表現力の向上に役立ちました。論文の書き方や、専門外の人への伝え方などを丁寧に教えてくれたプロジェクトメンバーの方々には、本当に感謝しています。

萩谷 私はこの2年間、「大学のIT化」というテーマで、大学へのコンサルティングサービスを手がけてきたので、シンポジウムでは、その提案内容について発表しました。これまでに学会で論文を発表することはありましたが、今回は社内の専門分野が異なる人に理解してもらい難しさを経験することができまし

た。また、私の提案内容の妥当性を確認できた、という意味でも良い機会だったと感じます。

高木 体験・実験したことを整理して、外に向けて発信することで、自分自身の理解がより深まったということです。

高橋 今回、技報で優秀論文賞をいただきましたが、もっと若手や中堅の人たちにどんどん書いてもらいたいと思っています。レベルの高い技術者をめざすなら、開発をするだけでなく、その成果を論文としてまとめ社内外に発表するまでを視野に入れて欲しい。私自身、何回か論文を書いています。回を重ねるたび、自分が選んだテーマの重要性はどこにあったのか、読者にとって技術的ヒントとなるのは何か、自分は何を伝えたいのか、といったことを常に意識するようになりました。



加藤 私は大学で量子情報理論を勉強しています。大学の先生と話す機会も多くベンチャー企業との接点もでき人脈が広がったことが、技術力および実行力の向上につながったと思います。

星野 私は大学でデータマイニングの研究をしました。国際学会で世界中の研究者と同じ土俵で勝負をするという厳しい競争にチャレンジしたことで、刺激を受けモチベーション向上につながりました。



基礎的な理論を大学で習得できたので、今後は社内で関連部門と協力しながら、ビジネスに活用したいと考えています。

大学院留学制度

毎年1~2名の技術者を、東京大学、東京工業大学、大阪大学、奈良先端科学技術大学院大学などに2~3年の期間で派遣。業務から離れてアカデミックな環境で研究に専念し、国内外の学会で発表するなどの成果を上げている。



受けた刺激や培った自信は、“次”へ進むモチベーションとなる

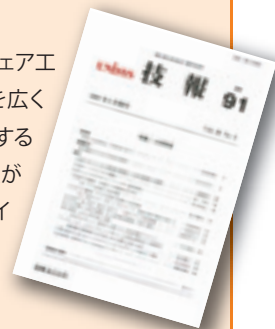
高木 今回の受賞や大学院留学などは、みなさんのキャリアプランにおいてどういう意味があったのでしょうか。

米田 私にとってテクニカル・シンポジウムの上位入賞は、業務で得た技術の最高の賞と認識しています。何度も挑戦してきましたが今回最優秀賞をいただけたことは、エンジニアとしてのキャリアにおいて、大きな成果であり自信となりました。日頃、仕事のことを家族に話しても「あ、そうなのね」で終わってしまうのですが、最優秀賞と言うと子供にもすごいと分かったようで、嬉しかったですね。

道坂 今回論文を書いたことで、データベースの面白さを再認識し、データベースのスペシャリストをめざしたいと思いました。運用・保守を経験したからこそ設計段階で必要な配慮なども分かったので、その経験を活かして今後は設計を担当したいと考えています。

技報

コンピュータ・サイエンスやソフトウェア工学に加え、業務への適用面の技術を広く取り上げ、その成果を社内外に紹介する技術論文誌で、1981年に創刊。社員が執筆し年4回発刊。社外向けWebサイトからのダウンロードも可能で、月2万件ほどのアクセスがある。



ユニシス技報

http://www.unisis.co.jp/tec_info/

テクニカル・シンポジウム

社員が日常の業務を通じて得た技術やノウハウについて年1回論文を募集（第1回は1972年）。年間約450件の応募のうち、



優秀作品については表彰および発表会を行うとともに、すべての論文内容を社内で共有し、社員一人ひとりの技術力向上や組織としてのノウハウ蓄積に役立っている。

社員と人事担当役員との座談会

高橋 論文を書くことは、新技術を含め、高い技術を追求し続けたいというモチベーションになります。ある特定の分野でテーマを決め論文にまとめようとする、新しい技術を体系的に吸収でき、技術力の向上につなげることができます。

加藤 私は大学で研究するうちに、まず学会で発表したいという思いが強まりました。技報やテクニカル・シンポジウムを軽視するわけではなく、最初に専門的な舞台で発表したものを、ブレイクダウンして社内に発表し還元したいということです。

星野 今回3年間大学に派遣されたことで、研究室における活発な議論や他社の技術者の方との勉強会を通じて、データ解析技術の土台を自分の中に確立できました。



留学したことで広がったネットワークを活用して、その技術を社内に浸透させていくことがこれからの使命だと思っています。そうすることが、大学への派遣制度を継続するうえでも重要だと考えています。

自分の感じることを大切に、 開拓精神を持ってひるまずに挑戦すべき

高木 とくに日頃心がけていることなど、同僚や後輩の社員へのメッセージをお願いします。

星野 日常の業務や携わっている技術の中で、自分が面白いと感じる部分があると思います。直接業務につながることでなくても、それを大切に、突き詰めていくことが重要です。いつかその技術を会社の中で活かせる日が来ます。

加藤 「最初から用意されている研究に満足するな」ということです。組織としてはルールに沿った教育も重要ですが、個人としては、ルール以外の部分を切り拓いていくことが大事です。将来この技術が重要だと考えたら自分から勉強すべきで、時間とお金については、上司に相談すれば良いと思います。

米田 テクニカル・シンポジウムは、技術力だけではなく、書く・話す・プレゼンテーションする総合的な能力を磨



くうえでも非常に良い場です。ほかの社員のみならずにも積極的に応募していただきたいです。

道坂 「何を書きたいのか」を明確にすることが重要だと感じました。最終的にそれを第三者に伝えるノウハウは、上司や先輩の指導を受けることで得られます。

萩谷 文章力を上げるには、まずは良い論文を読むことです。その後は、自分で書いて経験を積むしかないと思います。またテクニカル・シンポジウムの発表では、自分の研究や日常の業務が、会社にとってどんな意味があるのか、お客さまにとってどういう利点があるのか、というメッセージを込める必要があります。

高橋 技術者としての自信が強いメッセージを生み出します。技術者なので、「この分野ではだれにも負けない」という自負が重要です。社内外のだれよりも良く知っている、上手に話せるという自信を掴みとると、論文を書く時にもそこにしっかりとしたメッセージ性が出てくると思います。

高木 技術はお客さまに役立ってこそ価値のあるものです。日頃の努力によって技術を高め、それを平易に正しく伝えることのできる表現力を磨くことも大事ですね。そうすることで、お客さまにも理解され、納得していただける提案が可能となるだけでなく、社内でもノウハウの継承や共有化ができるのではないのでしょうか。

みなさんの今後のご活躍を期待します。

